

遺物から見た日本古代の仏教伽藍

菱田哲郎 | 京都市立大学

はじめに

日本列島の本格的な仏教伽藍は、588年に百済からの僧侶や技術者の渡来を受けて造営が開始した飛鳥寺に始まる。その後、7世紀前半にはおもに畿内地域で寺院が建立され、7世紀後半から8世紀前半にかけて、さらに造営が拡大し、宮城県から熊本県の範囲に至るまで寺院が建立された。その数は、瓦が出土する寺院遺跡だけでも600ヶ寺を下らず、また文献では『扶桑略記』に

記された持続6年段階に545ヶ寺という数字が、信憑性をもつものと考えてよい（菱田2005）。これらの寺院は、法隆寺のように法統を継承する寺院もあるが、多くは廃寺となっており、継続した寺院であっても、創建時の伽藍から変更が加えられている場合が多い。したがって、発掘された各地の仏教寺院の伽藍においてどのような活動がなされていたか、とくに法会などの儀礼がどのようにおこなわれていたかという点については研究が進んでいないのが現状である（山岸1991）。本報告では、古代寺院に対する発掘調査による出土遺物のうち、法会などの儀礼に関わる資料を取り上げ、日本古代の仏教伽藍の機能について検討することにしたい。

1. 法会を示す墨書土器

きわめてまれな例ではあるが、法会や法要の名を記した墨書土器が寺院遺跡から出土することがある。まず、確実に仏教儀礼に迫れる例としてこの墨書土器出土の寺院を取り上げる。

広島県にある安芸国分寺跡では、寺院の伽藍東方の東門付近の調査区で、木簡を含む文字資料を多く包含した廃棄土坑（SK451）が発見されている。その中からは「天平勝寶二年四月廿九日」と記された文書木簡とともに「安居」や「齋會」など、行事や法会を示す名称を墨書した土器が出土している（藤岡・妹尾2011）。器形がわかるものはいずれも杯蓋や杯身であり、土器の用途そのものは不明であるが、法会での使用を明示

するために書かれたと考えられる。安居は、4月15日から7月15日までおこなわれる夏期の修行（夏講）であるが、天平勝宝元年（749）に孝謙天皇が安居を命じたことが『東大寺要録』にみえ、年代的にもこの墨書土器との関係が考えられている（佐竹2002）。安居を命じる記事はほかに幾度かあり、一般的な行事として確立していたことがうかがえ、出土資料でも、「安居」の墨書土器が大宰府の観世音寺にも存在している。

一方、齋會は、食事をとまなう法会で、宮中の御齋會のような正月の金光明經読誦にかかわる可能性と、木簡の時期に近い天平勝宝2年5月に実施された仁王会の可能性が示唆されている（佐竹2002）。墨書土器と木簡がまったく同じ時期であるかどうかは問題が残るが、後者の可能性がより大きいのではないかと考える。東大寺では、聖武天皇の死後、すなわち天平勝宝8歳（756）以後にはその命日5月2日におこなう法会が齋会とされており、その前史として、もともと5月の行事であった可能性が考えられるからである。

安居や齋會は、よく知られた仏教行事・法会であり、安芸国分寺の墨書土器により、それらが国分寺でおこなわれていたことが明確になる。このほか、法要を示す墨書土器として注目されるのが、京都府木津川市の神雄寺（かみおでら）跡から出土した「悔過」の墨書土器である。8世紀中頃の須恵器杯身に記されたものであり、寺名を記した墨書土器が多数出土する中で、1点のみ出土している。「悔過」そのものは古代における重要な法要の一つで、罪を懺悔して報いを免れることを目的としていたが、次第に法会としての形を整えて、依るところの本尊の名

を付け、薬師悔過、十一面悔過、阿弥陀悔過、吉祥悔過といった法会が成立している。ただし、記録からだけでは具体的な普及過程が明らかでなく、神雄寺跡の墨書土器は、そのような悔過を含んだ法会の場合を明らかにした点で重要視できる。

この神雄寺跡からは仏教行事・法会に関わる遺物が多数出土している。5000点を超す土師器灯明皿は、日常の灯火ではなく、千灯会や万灯会と称される法会に関わるものであろうし、彩釉山水陶器と称される遺物は、仏事に関わる仏具であることは間違いない。灌仏会に関わる資料とみる見方もある（上原2010）。須恵器の横鼓も仏教行事の際に執り行われた外来の音楽に関係すると考えられ、和歌を記した木簡についても、薬師寺の仏足石に刻まれた歌との対比から、仏教行事に際して読み上げられた歌木簡であると推測されている（吉川2014）。これらの内容から、悔過のほかにもさまざまな仏教行事がおこなわれていたことが明らかであり、この寺院の伽藍を舞台として活発な仏教行事が執り行われていたことがうかがえる。

2. 寺院伽藍と法会

法会の会場としての寺院を検討するため、いまだ少しこの神雄寺跡の伽藍の特徴について見ておこう。塔を西、仏堂（金堂）を東に置く点では法起寺式伽藍配置であり、白鳳時代（7世紀後半）の寺院と共通するが、塔が著しく小型化しており、仏堂との間に距離や高低差もあり、並置されているという状況ではな

い。仏堂も前代と比べると小型であり、内部で法会などをおこなう空間はなく、仏堂の前面に建てられた礼堂が仏教行事のための施設である。そして、それらをとりにくくように溝が巡らされており、溝の起点は泉（湧水地）となり、そこからも鉄鉢などの法具が出土している（大坪2014）。いわば浄水を伽藍内に引き入れることを意図した立地を取っていることがわかる。

法会の会場としての寺院を検討するため、いまだ少しこの神雄寺跡の伽藍の特徴について見ておこう。塔を西、仏堂（金堂）を東に置く点では法起寺式伽藍配置であり、白鳳時代（7世紀後半）の寺院と共通するが、塔が著しく小型化しており、仏堂との間に距離や高低差もあり、並置されているという状況ではない。仏堂も前代と比べると小型であり、内部で法会などをおこなう空間はなく、仏堂の前面に建てられた礼堂が仏教行事のための施設である。そして、それらをとりにくくように溝が巡らされており、溝の起点は泉（湧水地）となり、そこからも鉄鉢などの法具が出土している（大坪2014）。いわば浄水を伽藍内に引き入れることを意図した立地を取っていることがわかる。

金堂の前面に礼堂を置く寺院は、白鳳時代にはなく、8世紀中頃になって出現する。地方寺院の事例では、兵庫県西脇市の上ノ段遺跡（うえのだんいせき・野村廃寺）が8世紀中頃という比較的早い例として取り上げることができる。ここでは、土塁で囲われた内部に金堂と塔を配置し、金堂の前面に小規模な礼堂を置いている。金堂の柱列と礼堂の柱列の位置とがほぼ揃うので、金堂の仏像を礼拝するという目的で設けられたことは確か

だと言える。ここでおこなわれた法会などは不明であるが、幢幡を立てた支柱の跡が数カ所あり、仏事に際して幡が飾られていたことがうかがえる。また、寺域に接して工房や建物からなる維持管理施設があり、そこには井戸も設けられていた。

礼堂の成立については、東大寺二月堂や法華堂が重要な位置を占めている。とくに二月堂は十一面観音を本尊とし、それに対する悔過をおこなう施設として実忠によって建てられた仏堂と伝えられている。建築変遷の検討から、二月堂は、もともとは廂をもたない三間二面（桁行三間梁間三間）の仏堂であり、それに礼堂が付加された形になったのが平安時代はじめころまでであったと推測されており（山岸1990）、神雄寺跡などの8世紀中頃の礼堂の存在も勘案すると、二月堂の創建当初から仏堂と礼堂が一体化した双堂形式であった可能性も考えられる。関東地方で9世紀から展開する「村落寺院」を検討した須田勉は、瓦葺きではない仏堂を中心とする寺院の中に正堂－礼堂という関係をもつ例が多くあり、なかには新林遺跡のように東大寺二月堂と同じく双堂形式であったものもあり、悔過を中心とする仏堂の伝播と推測した（須田2006）。「村落寺院」から出土する墨書土器に対する検討から、須田は、千手観音や吉祥天など、悔過の対象となる仏像が普及しており、とりわけ現世利益を説く『千手経』の広範な普及を想定している。古代の寺院でおこなわれる仏教行事のなかで悔過がどのくらいの比重を占めていたかは、まだまだ検討の余地があるが、「村落寺院」のような本格的な伽藍を構成しない仏教寺院の普及にとって、悔過が重要な役割を果たしていた可能性は十分に考えられる。

「村落寺院」では建築物としての木層塔をもたない場合が多いが、かわりに模型塔の一種である瓦塔が置かれていた。瓦塔の成立過程は不明瞭ではあるが、8世紀中頃以降に関東地方で爆発的に建立されるようになる。当初は瓦製の仏堂も作られていたものの、資料の数では圧倒的に塔が多い。このことと「村落寺院」の伽藍構成とは無関係でなく、仏堂のみ、あるいは仏堂（正堂）と礼堂で構成される寺院においては、そこでおこなわれる仏教行事が大きな役割をもち、塔は模型とも言える瓦塔で十分であったためと推測できるからである。このような塔の形骸化という点については、先に触れた神雄寺跡の木層塔が著しく小型であったことを想起させる。出土遺物から明らかなように、神雄寺跡では法会の会場という役割が増大し、仏堂と礼堂の周囲が整備される一方で、塔の役割が相対的に小さくなっていくことを物語っている。これらは、8世紀半ばを起点とする伽藍の変化として重視する必要がある。

8世紀中葉は国分寺に代表されるように護国仏教、国家仏教が高揚し、七重塔のような壮麗な塔が建てられていた時代でもある。そして、立派な塔を建てるという行為はその後一貫して続いていくことも確かな事実である。このことを念頭に置くと、先に触れた塔が形骸化する一方で、法会のための仏堂を軸とする寺院形式の成立と普及は、仏教信仰の多様化を物語っていると考えるべきであろう。つまり、8世紀後半以降、日本列島では鎮護国家のための伽藍が展開する一方で、仏堂を中心とする仏教空間が普及し、悔過などの仏像を対象とする法要が、民間も含めて浸透していった状況を推測することができる。

3. 造塔供養

8世紀になって塔そのものにも多様化が現れる。宝亀元年に10大寺に百万の三重の木製小塔、いわゆる百万塔が置かれたように、きわめて小さな模型塔が登場したことが端的な例である。これは法隆寺に残る百万塔陀羅尼として有名であるが、恵美押勝の乱の平定を受けて発願されたものであり、『無垢浄光大陀羅尼經』が説く滅罪の願意があったとされている。このことと関連して、塔を象ったと考えられる供養具が8世紀に登場することが明らかになっている。京都府八幡市の美濃山廃寺（みのやまはいじ）から出土した覆鉢状土製品は、文字どおり塔の相輪の覆鉢を模したと考えられる資料で、直径10cm程度の小型品である（大洞2006）。この覆鉢形に加え、相輪の上部を象ったと考えられる「ひさご形」の土製品もあり、これらが多数、寺院の境内から出土しており（伊野・関広2013）、「大田」という人名と思われる刻字をもつ覆鉢形土製品も存在することから、死者の追善などの供養に用いられた可能性が想定できる。平安時代には墓塔、卒塔婆が登場し、死者の追善の造塔も広く普及するが、その先駆的な形態が奈良時代に現れていると評価できる。多数の塔が作られ納められる背景には、寺院における仏教行事の一つとして小塔の奉獻がおこなわれていたと考えられる。

多くの塔を立てるという行為では、熊本市の池辺寺（ちへんじ）跡の百塚地区で発見された整然と並ぶ百基の塔が、最も顕著な例である。この百塔のある斜面の下方に仏殿を中心とする

伽藍が建設されており、あたかも百塔を礼拝するような空間構成がされている（熊本市教育委員会2008）。それぞれの塔は方形の石組みの上に別作りの相輪部を組み合わせるものであり、石製の宝珠や相輪が出土している。これらがもともと百塔と呼ばれたことは、金子塔(かなごのとう)と呼ばれる 建武4年(1337)に建立された石製の笠塔婆に「百塔」の記載があることから確実である。したがって、仏教の名数である百を意識して計画的に造立された塔群であると言え、百万塔との関連も想定してよい。なお、出土遺物からこれらの塔が建てられたのは9世紀と考えられており、造塔供養の広がりを示す事実として評価することができる。

さらに時代が下がるとこのような石組の塔の造立がより明確になる。香川県まんのう町の中寺廃寺（なかでらはいじ）で発見された16基の石組遺構は、10世紀に下る例ではあるが、池辺寺跡の百塔と似た作り方であり、石塔建立の流行を示す資料である。この例について、永観2年（984）に成立した『三宝絵』に記述された仏教行事である「石塔」との関係が示唆されている。これは、川原などで石を積んで塔を作ることにより、死者の追善をおこなうもので、二月におこなわれていた。この法会に関し、上原真人は『法華経』の方便品に示される造塔による功德を重視する見解を提示している（上原2007）。池辺寺跡のような整然とした百塔と中寺廃寺の石塔とが同じ契機であるかどうかは疑わしいが、同種の塔を多数建てる行為が一つの仏教行事として確立していたと言える。形は異なるが、百万塔や土製の小塔（覆鉢形土製品とひさご形土製品）も含め、塔に対す

る信仰の広がりを知ることができる。

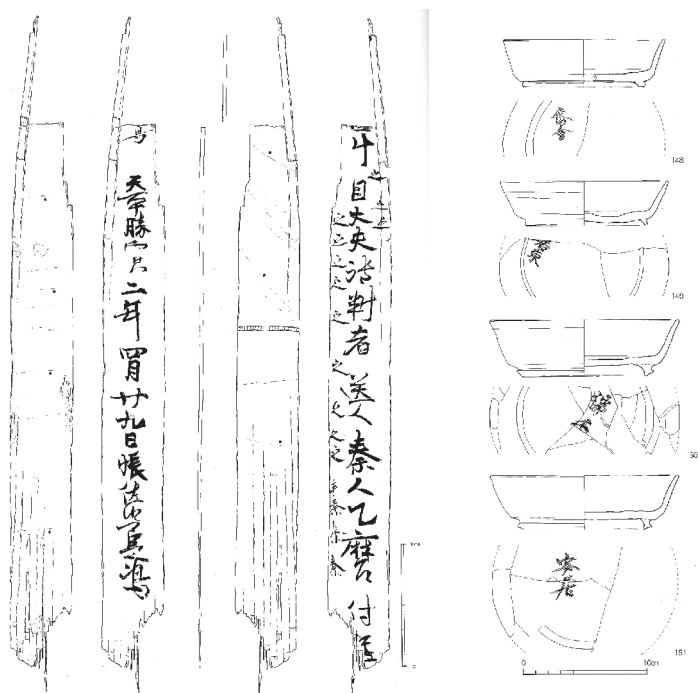
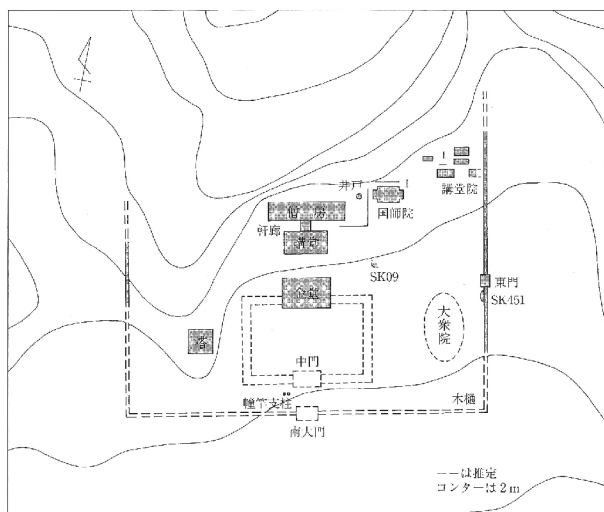
おわりに

東大寺など記録の残る寺院では、さまざまな法会・仏教行事がおこなわれていたことが知られるが（吉川2014）、各地の寺院においても活発な法会・仏教行事がおこなわれ、仏教信仰の確実な広がりを知ることができた。その内容に、仏堂・礼堂を中心とした法会空間を主とするものと、造塔を中心に置くものがあったように、多様なあり方が発現することが特徴である。そのような現象が見られるようになるのが8世紀中頃であり、それ以前の地方寺院では法会・仏教行事の痕跡が希薄であると推測される。燃灯に用いた灯明皿についても、用いられた土器が7世紀代に遡る例はほとんどなく、この推測を支持している。このように8世紀中頃が日本における仏教儀礼の転換点と位置づけることができる。

山林寺院や泉を抱える寺院が8世紀中頃を堺に増えてくるが、これも法会や仏教行事の会場としての機能と関係があると考え（菱田2010）。福井県小浜市にある若狭神宮寺（わかさじんぐうじ）は、東大寺二月堂の修二会に際し、境内の「關伽井」と呼ばれる泉の水を供給する「お水送り」の行事で知られる寺院であり、塔跡の発掘調査の結果、8世紀中頃には成立していることが明らかになっている。この若狭神宮寺は泉を抱えた寺院であるばかりでなく、実忠がはじめた二月堂の悔過の法要との関係もうかがえ、新しい仏教行事の普及と深い関わりがある寺院

であると言える。その二月堂を含めた東大寺上院地区もまた「若狭井」をはじめとする泉を多く抱えた仏教空間であり、泉を意識した寺院の立地の典型と言え、その背景には、寺院立地の浄処観があったと考えられる。

『続日本紀』天平17年（745）10月19日条では、聖武天皇の不予に際して薬師悔過が命じられた際、「京師・畿内の諸寺と諸名山浄処とをして薬師悔過の法を行わしむ」とあり、悔過の法において浄処が指示されている。このような浄処での法会が意識されることから山林寺院や泉を抱えた寺院の増加が促されたと考えられ、本稿で取り上げた神雄寺跡、池辺寺、中寺廃寺はいずれも8世紀半ばから後半に成立していることも偶然ではない。活発で多様な法会の実施と、山林寺院をはじめとする浄処の伽藍の急増とが、軌を一にした現象であると捉えることができよう。



도1 廣島縣・安藝國分寺의 遺構하고 出土遺物

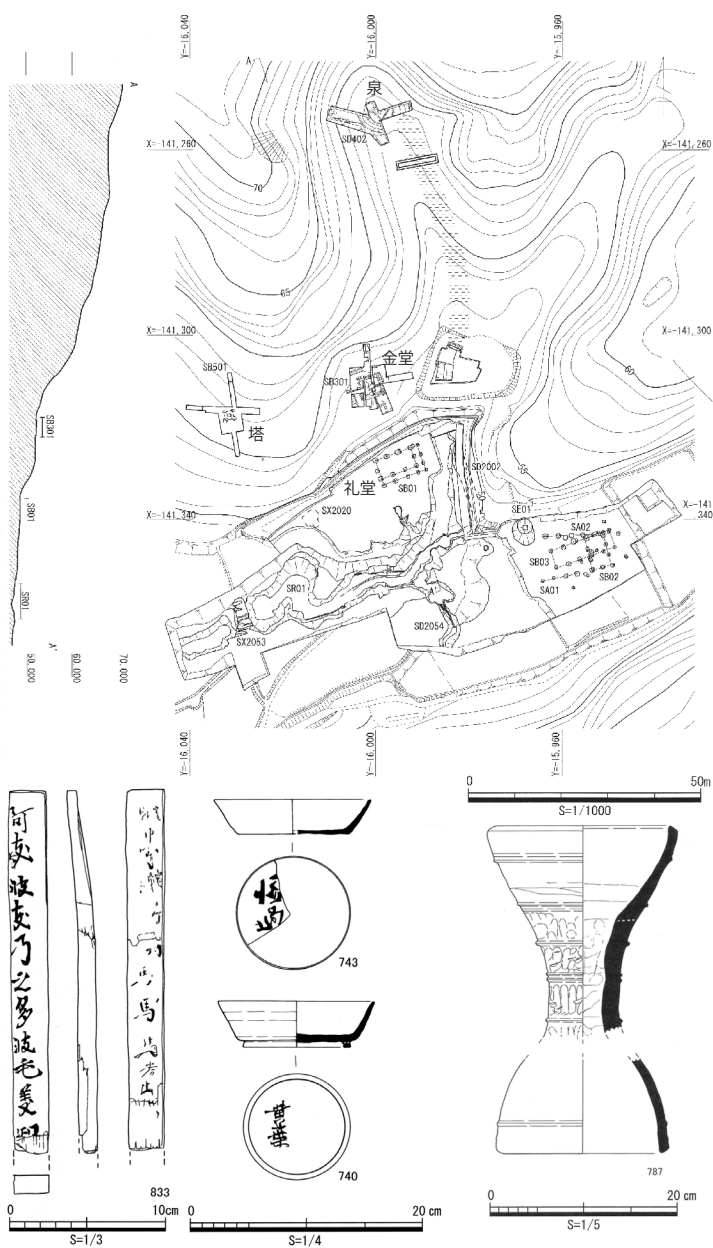


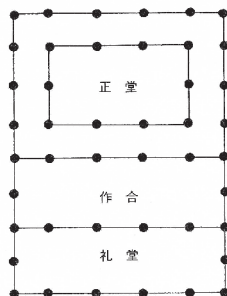
図2 京都府・神雄寺跡の遺構하고 出土遺物



도3 關東地方의 「村落寺院」

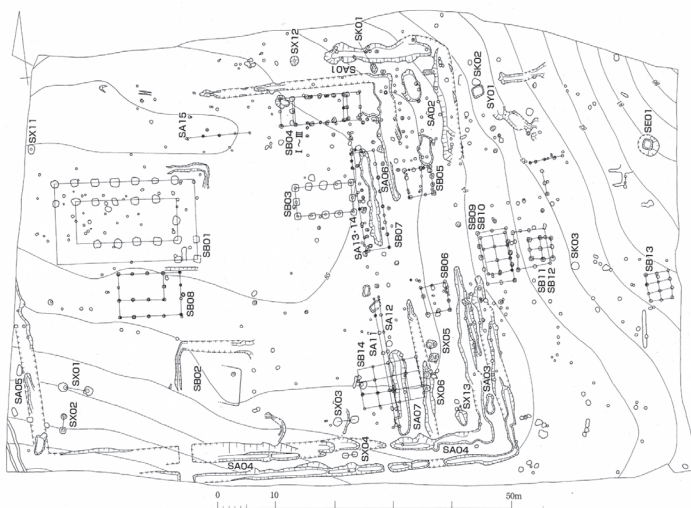


東大寺二月堂

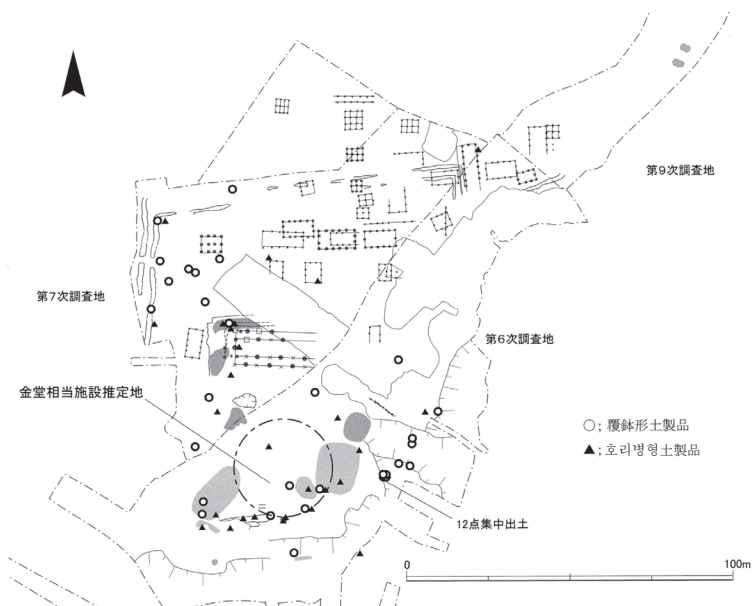


東大寺法華堂

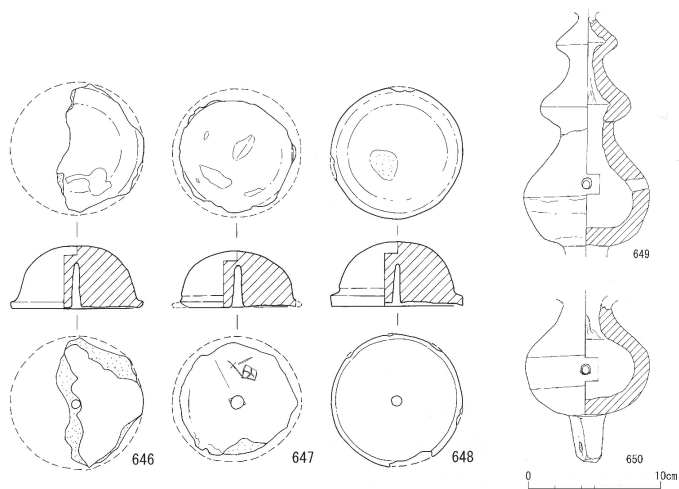
도4 東大寺의 双堂建物



도5 兵庫縣・上ノ段遺跡(野村廃寺)



도6 京都府・美濃山廃寺



도7 美濃山廃寺의 覆鉢形 土製品하고 호리병형 土製品

- 伊野近富・関広尚世, 「美濃山廃寺出土土製品について」, 『京都府遺跡調査報告集』 154冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター, 2013
- 上原真人, 「中寺廃寺跡の史的意義」, 『中寺廃寺跡発掘調査報告書』、まんのう町教育委員会, 2007
- 上原真人, 「神雄寺の彩釉山水陶器と灌仏会」, 京都府埋蔵文化財調査研究センター, 『天平びとの華と祈り一謎の神雄寺一』、柳原出版, 2010
- 後藤建一, 「大知波峠廃寺跡の構造と変質」, 『大知波峠廃寺跡 確認調査報告書』、静岡県湖西市教育委員会, 1997
- 佐竹昭, 「安芸国分寺跡451号土坑出土の木簡について」, 『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書 IV』、東広島市教育文化振興事業団, 2002
- 須田勉, 「古代村落寺院とその信仰」, 国土館大学考古学会 編, 『古代の信仰と社会』、六一書房, 2006
- 大洞真白編, 『美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡 範囲確認調査 (1~5次) 報告書』、八幡市教育委員会, 2006
- 菱田哲郎, 『古代日本 国家形成の考古学』、京都大学学術出版会, 2007
- 菱田哲郎, 「奈良時代の泉と仏堂」, 京都府埋蔵文化財調査研究センター, 『天平びとの華と祈り 一謎の神雄寺一』、柳原出版, 2010
- 藤岡孝司・妹尾周三, 「安芸国分寺」, 『国分寺の創建 思想・制度 編』、吉川弘文館, 2011
- 山岸常人, 「悔過会と仏堂 (東大寺二月堂)」, 『中世寺院社会と仏堂』、塙書房, 1990

山岸常人, 「発掘寺院の建築」, 『季刊考古学』 34号, 1991

吉川真司, 「国分寺と東大寺」, 須田勉・佐藤信 編, 『国分寺の創建 思想・制度編』、吉川弘文館, 2011

吉川真司, 「天平文化論」, 『岩波講座 日本歴史』 第3巻、岩波書店, 2014

Function of Buildings in Buddhism temple in Ancient Japan from Excavated Artifacts

Tetsuo Hishida | Kyoto Prefectural University

After Buddhism was introduced from Korea in the sixth century, more than 600 Buddhist temples were erected by the middle eighth century. Although Buddhism ritual played an essential role in the temples, it is uncertain in ancient Japan. But we have some evidences for the ritual by excavated artifacts from temple sites. Firstly I mention about pottery with literature which were found in Aki Kokubunji (安藝國分寺) temple and Kamiadera (神雄寺) temple. These pottery show the ritual of 'Ango' (安居), 'Saie' (齋

會) , and 'Keka' (悔過) . The last one that means removing sin by confession is important and popular ritual in ancient Japan. And in Kamiodera temple various Buddhism ritual, for instance ritual with thousands of light in earthenware dish were carried out.

Kamiodera temple has distinctive layout of building complexes. There are a stupa at the western side and a building for Buddhism statues at the eastern side, which is popular layout in the late half of Seventh century, but the stupa and building for Buddhism statues are very small, and the building is attached by small building for religious services. And the temple site has another character that the ditch comes around the buildings from a spring. These characters mean the new change took place in the layout of the Buddhism temples in middle of eight century.

Building for religious services were found in several temples like Uenodan site (上ノ段遺跡) and Nigatsudo (二月堂) building in the Todaiji (東大寺) temple which is building only for 'Keka'. Then in Kanto district, there are several sites that have both building for Buddhism statues and building for religious services. In these cases, they have no stupa or ceramic model of stupa. It means that the stupa became formal and Buddhism ritual like 'Keka' spread to the folk in local regions. While big wooden multistory stupas were built on every central temples named as Kokubunji (國分寺) in each provinces and great temples in the capital Nara (奈良) , Some temples made Buddhism space concentrated to the buildings for Buddhism status. These aspects show the diversity of Buddhism

worship in middle of eight century in Japan.

In late eight century, there is another new movement in Buddhism ritual. It is typical as 'Hyakumantou Darani' (百萬塔陀羅尼), or a million small stupas which were devoted to 10 important temples near the capital. And small earthenware stupas were found in the local temple as Minoyama (美濃山廃寺) temple site in eight century. I think these small stupas were devoted to the temple for memorial service for the dead. The ritual of devoting small stupas is new current which continues to the stupas as a grave marker in the middle age.

A hundred of Rectangular stone stupas built neatly in the Chihenji (池邊寺) temple site in ninth century. I consider it also as a devoting stupa. And another instance of Nakadera (中寺廃寺) temple site in tenth century is not neatly but I consider it as Buddhism ritual to build many rectangular stone stupas for memorial service for the dead. These evidences mean the spread of the new ritual and worship to the stupa which was written in the text in Heian period.

As I mentioned above, there are new change of Buddhism ritual in middle of eight century. It means the spread of Buddhism worship and ceremony to the local societies. At the same time, temples located on the mountain and near the spring increased. I think these new phenomena in the Buddhism temple related to the spread of some rituals of Buddhism. And since there is an article that 'Keka' ritual needed the pure locations, I think this demand urge the building on mountains and near springs.

유구(遺構)로 본 일본 고대 불교가람(佛教伽藍)

히시다 테츠오 | 교토부립대학

번역 양종현 | 국립경주문화재연구소

머리말

일본열도에서 본격적으로 조영된 불교가람은 588년에 백제에서 승려와 기술자의 도래에 따른 아스카데라(飛鳥寺)로부터 시작되었다. 이후 7세기 전반에는 대부분 키나이(畿内)지역에 사원이 건립되었고, 7세기 후반부터 8세기 전반에 이르러 조영이 광대해지면서 미야기현(宮城縣)에서 쿠마모토현(熊本縣)의 범위까지 사원이 건립되었다. 그 수는 기와가 출토되는 사원만도 600여 개소에 이른다. 그리고 문헌에

는 『후소우라쿠키(扶桑略記)』에 기록된 지토(持統)6년 단계에 ‘545 개소의 절’이라는 숫자가 보이며, 이는 신빙성이 있다고 생각된다. 이러한 사원은 호류지(法隆寺)와 같이 법통(法統)을 계승한 사원도 있으나, 많은 사원이 사라지는 한편, 존속되어 오더라도 창건 당시의 가람이 변경된 경우가 많다. 이러한 점에서 고대에 있어서 불교사원의 가람에 어떠한 활동이 있었는지, 특히 법회 등의 의례(儀禮)가 어떠한 것인지에 대한 연구는 미진한 상황이다. 이번 발표에서는 고대사원에 대한 발굴조사에서 출토된 유물 중 법회 등의 의례와 관련된 자료를 택하여 일본 고대 불교가람의 기능에 대하여 검토해 보고자 한다.

1. 법회를 나타내는 묵서토기(墨書土器)

극히 드문 예이기는 하지만 법회를 기록한 묵서토기가 사원유적에서 출토되기도 한다. 먼저 확실하게 법회와 근접한 예로서 묵서토기가 출토된 사원을 들어보겠다.

히로시마(廣島縣)에 위치하는 아키국분사터(安藝國分寺跡)에서는 사원 가람이 동문 부근 조사구의 폐기토갱(廢棄土坑, SK451)에서 목간(木簡)을 포함한 문자자료가 다량 발견되었다. 그 중에서는 「천평승보 2년 4월 29일(天平勝寶二年四月廿九日)」이라고 기록된 목간과 함께 「안거(安居)」와 「재회(齋會)」 등 행사와 법회를 나타내는 명칭을 묵서로 기록한 토기가 출토되었다(藤岡・妹尾2011). 기형(器形)을 알 수 있는 것은 배개(杯蓋)와 배신(杯身)이다. 토기의 용도는 알 수 없으나, 법회에서 사용한 것을 명시하는 글이라고 생각한다. 안거는 4월 15일부터 7월 15일까지 행하는 하기(夏期)의 수행(夏講)으로서 천평승보

원년(天平勝寶 元年, 749)에 고켄천황(孝謙天皇)이 안거를 명하였다는 것이 『토다이지요록(東大寺要錄)』에 보이고, 연대적으로도 이 묵서토기와와의 관계를 생각할 수 있다(佐竹2002). 안거를 명한 기록은 이외에도 몇 가지가 있으며, 일반적인 행사로서 확립되었던 것으로 보이고, 출토자료에서도 「안거」 묵서토기가 다자이후(大宰府)의 칸제온지(觀世音寺)에서도 확인되었다.

한편, 재회는 식사(食事)와 더불어 행하는 법회로서 궁중(宮中)의 어재회(御齋會)와 같이 정월(正月)의 금광명경독송(金光明經誦誦)일 가능성과 목간의 시기에 근접한 천평승보 2년 5월에 실시한 인왕회(仁王會)의 가능성이 지적되었다.(佐竹2002) 묵서토기와 목간이 정확히 같은 시기였을지 문제가 남기는 하지만 후자일 가능성이 높다고 생각한다. 토다이지(東大寺)에서는 쇼무천황(聖武天皇)의 사후 즉 천평승보 8세(756) 이후에는 5월 2일에 행하는 법회를 재회라고 하는데, 그 이전에는 원래부터 5월의 행사였을 가능성이 있다고 생각한다.

안거와 재회는 잘 알려진 불교행사·법회이며, 야키국분사의 묵서토기를 통하여 국분사에서 행하였다는 사실이 명확해졌다. 그 밖에 법회를 나타내는 묵서토기로 주목되는 것이 교토부 키즈가와시의 카미오데라(京都府 木津川市 神雄寺)터에서 출토된 「회과(悔過)」 묵서토기이다. 8세기 중엽의 수에키(須恵器)의 배신(杯身)에 기록된 것으로 사명(寺名)을 기록한 묵서토기가 다수 출토된 가운데 한 점만이 출토되었다. 「회과」 그 자체는 고대에 있어서 중요한 법회 중 하나로 생각되고, 변화를 이루어 가면서 중세에까지 이른다. 고대의 상황이 어땠는지는 불명확한 점이 많다. 카미오데라터의 묵서토기는 회과 법회의 장을 밝혀주는 점에서 중요시된다. 이 카미오데라터는 불교행사·법회에 관한 유물이 다수 출토되었다. 5000점이 넘는 하지키 등잔(土

師器 灯明皿)은 일상에서 사용하는 등잔이 아니라 천정회(千燈會)와 만정회(萬燈會)로 불리는 법회와 관련된 것이고, 채유산수도기(彩釉山水陶器)라는 유물은 불사(佛事)와 관련된 불구(佛具)라는 것은 틀림이 없으며, 관불회(灌佛會)와 관련된 자료라는 의견도 있다(上原2010). 수에키 횡고(橫鼓)도 불교행사 중 외래의 음악과 관계가 있다고 생각하고, 화가(和歌)를 기록한 목간에 대해서도 야쿠시지(藥師寺)의 불족석(佛足石)에 있는 것과 같이 불교행사 중에 읽었던 화목간(歌木簡)이 있을 것으로 추측한다(吉川2014). 이러한 내용으로 보아 회과 이외에도 여러 법회와 불교행사가 있었다는 것은 확실하고, 이 사원의 가람을 무대로 활발한 불교행사가 있었을 것으로 판단한다.

2. 사원가람과 법회

법회의 회장(會場)으로서 사원을 검토하기 위해서 잠시 카미오대라타의 가람의 특징을 살펴보겠다. 탑을 서쪽에 두고, 불당(佛堂, 金堂)을 동쪽에 두는 점에서는 호키지식(法起寺式) 가람배치이다. 이는 하쿠오 시대(白鳳時代, 7세기 후반)의 사원과 공통되지만 탑이 현저하게 소형화되었고, 불당과의 거리와 높이차가 있으며, 나란히 배치되지 않은 상황이다. 불당도 전대와 비교하여 볼 때 소형화되었고, 내부에서 법회등을 할 수 있는 공간이 없고, 불당의 전면에 위치하는 예당(禮堂)이 불교행사를 위하여 지어진 것이다. 그리고 이를 둘러싸는 구(溝)가 있으며, 구의 기점(起点)은 샘(泉, 湧水地)인데 이 곳에서도 철발(鐵鉢) 등의 법구가 출토되었다(大坪2014). 이른바 정수(淨水)를 가람 내에 들이기를 의도한 입지를 택하였다고 생각한다.

불당의 전면에 예당을 설치한 사원은 하쿠오시대에는 없고, 8세기 중엽부터 나타나기 시작한다. 지방사원의 사례로는 효고현 니시와키시(兵庫県 西脇市)의 우에노단유적(上ノ段遺跡, 野村廢寺)이 8세기 중엽으로 비교적 이른 시기의 사례로 들 수 있다. 이 곳에서는 토루(土塁)로 둘러진 내부에 금당과 탑을 배치하고, 금당의 전면에 소규모의 예당을 배치하였다. 금당의 기둥 위치가 거의 갖추어져 있기 때문에 금당의 불상을 예배하기 위한 곳으로 설치한 것은 확실한 듯하다. 여기서 행해진 법회 등은 명확하지 않지만 당번(幢幡)을 세우는 지주(支柱)터가 몇 개 있고, 불사 중에 번이 장식되었다고 생각한다. 그리고 사역에 근접한 공방(工房)과 건물에 대한 유지관리시설이 있으며, 우물도 갖추었다. 예당의 성립에 대해서는 토다이지의 니가츠도우(二月堂)와 훗케도우(法華堂)가 중요한 위치에 있다. 특히 니가츠도우는 불공견색관음(不空羂索觀音)을 본존으로 하고, 이에 대한 회파를 여는 시설로 조성되었다고 전해진다. 관동지방(關東地方)에서 9세기부터 전개되는 「촌락사원(村落寺院)」을 검토한 수다 츠토무(須田勉)는 기와를 올리지 않은 불당을 중심으로 하는 사원 가운데 정당(正堂)－예당(禮堂)이라는 관계를 갖는 사례가 많고, 그 중에는 신바야시유적(新林遺跡)과 같이 토다이지의 니가츠도우도 마찬가지로의 불전(正堂)과 예당이 일체화된 쌍당건축(雙堂建築)이며, 회파를 중심으로 불당의 전파를 추측하였다(須田2006). 「촌락사원」에서 출토된 묵서토기에 대해 검토한 바에 따르면 수다는 천수관음(千手觀音)과 길상천(吉祥天) 등 회파의 대상이 되는 불상이 보급되었고, 유난히 현세이익을 설하는 『천수경(千手經)』의 넓게 보급되었다고 상정하였다. 고대 사원에서 행해진 불교 행사 중 회파가 얼마 만큼의 비중을 차지하였는지는 아직 검토할 여지가 있으나, 「촌락사원」과 같은 초당(草堂)을 중심으로 하는 불교사원

의 보급에 따라서 화과가 중요한 역할을 했다는 가능성은 충분히 있다고 생각한다.

「촌락사원」에서는 본격적인 탑을 두지 않는 경우가 많고, 그 대신 모형탑(模型塔)의 한 종류인 와탑(瓦塔)을 두는 경우가 있다. 와탑의 성립과정은 명료하지 않지만, 8세기 중엽 이후에 관동지방에서 폭발적으로 건립되었다. 당초에는 와제(瓦製)의 불전(불殿)도 제작되었으며, 지료의 수로는 압도적으로 탑이 많다. 이와 함께 「촌락사원」의 가람 구성은 관계가 없는 것이 아니라 불전만이, 또는 불전(정당)과 예당이 구성된 사원에는 그와 관련된 불교행사가 큰 역할을 갖고 있었고, 탑은 모형으로 불리는 와탑이 충분한 역할을 했을 것으로 추측한다. 이러한 탑의 형해화(形骸化)라는 점은 앞서 말한 카미오데라터의 탑이 현저하게 소형화된 점을 상기시킨다. 출토유물로 밝힌 바와 같이 카미오데라는 법회의 회장으로서 역할이 증대되어 불전과 예당의 주위가 정비되는 한편 탑의 역할이 상대적으로 작아졌다고 할 수 있다. 이는 8세기 중엽을 기점으로 하는 가람의 변화와에서 중요시할 필요가 있다.

8세기 중엽은 국분사를 대표하는 호국불교(護國佛敎), 국가불교(國家佛敎)가 고양되고, 7층탑과 같은 장려(壯麗)한 탑이 건립되는 시기이기도 하다. 그리고 훌륭한 탑을 세우는 행위는 그 후에도 일괄하여 지속하는 것도 확실한 사실이다. 이러한 점을 염두해 두면 앞서 말한 탑이 형해화되어 법회를 위하여 불당을 경유하는 사원의 성립과 보급은 불교신앙의 다양화를 이야기한다고 생각한다. 즉 8세기 후반 이후 진호국가(鎭護國家)를 위한 가람이 전개되는 한편에는 민간의 사람들이 가운데 회과 등의 법회를 중심으로 가람이 보급되었다고 평가된다.

3. 조탑공양(造塔供養)

8세기에 들어서면서 탑은 그 자체로도 다양화가 이루어졌다. 보구원년(寶龜元年)에 10대사(10大寺)에 백만의 삼층 목제소탑(木製小塔), 즉 백만탑(百萬塔)이 설치된 것과 같이 극히 작은 모형탑이 등장하는 단적인 예가 있다. 이 것은 호류지(法隆寺)에 남아백만탑다라니(百萬塔陀羅尼)로서 유명한데, 에미노오시카츠난(惠美押勝乱)의 평정을 받아 들어 발원한 것으로 『무구정광대다라니경(無垢淨光大陀羅尼經)』이 설한 멸죄(滅罪)의 원의(願意)가 있다고 한다. 이와 관련하여 탑을 모방하였다고 생각되는 공양구가 8세기에 등장하는 것으로 밝혀졌다. 교토부 아와타시(京都府 八幡市)의 미노야마하이지(美濃山廢寺)에서 출토된 복발상토제품(覆鉢狀土製品)은 글자대로 탑 상륜(相輪)의 복발을 모방한 것으로 생각되는 자료로서 직경10cm정도의 소형품이다.(大洞2006) 이 복발형에 더하여 상륜 상부를 본뜬 것으로 보이는 「호리병형(ひさご形)」의 토제품이 있으며, 이러한 것들이 다수 사원의 경내에서 출토되어(伊野・関広2013), 「오오다(大田)」라는 사람의 이름인 듯 한 각자(刻字)를 둔 복발형토제품도 존재하는 것으로 보아 망자의 명복(追善) 등을 공양할 때에 사용했을 가능성이 상정된다. 헤이안 시대(平安時代)에는 모탑(墓塔), 줄탑과(卒塔婆)가 등장하여 망자 명복의 조탑도 보급되지만 그 선구적인 형태가 나라시대(奈良時代)에 나타난다고 평가할 수 있다. 다수의 탑이 제작되어 납입되는 배경에는 사원에 있어서 불교행사의 하나로서 소탑을 봉납하는 행위가 일어났다고 생각할 수 있다.

많은 탑을 건립하는 행위로는 쿠마모토시(熊本市)의 치엔지(池辺寺)터의 백총지구(百塚地區)에서 발견된 정연하게 나열된 탑이 가장

현저한 예라고 하겠다. 이 백탑(百塔)이 있는 사면(斜面)의 아래쪽에 불전을 중심으로 하는 가람이 건설되었고, 마치 백탑을 예배하는 듯한 공간구성이 되었다.(熊本市教育委員会2008) 각각의 탑은 방형의 석재를 조합하여 별도로 제작한 상륜부를 조립하는 것으로서 석재 보주(寶珠)와 상륜이 출토되었다. 이러한 것들이 원래부터 백탑으로 불린 것은 금자탑(金子塔(카나고노토우, かなごのとう))으로 불리는 건무 4년(建武 4 年, 1337)에 건립된 석재 입탑파(笠塔婆)에 「백탑(百塔)」으로 기재된 것에서 확실하다고 하겠다. 그러므로 불교의 명수(名數)인 백(百)을 의식하여 계획적으로 조성한 탑군(塔群)이라고 하여 백만탑과의 관련을 상정해도 좋다. 더구나 출토유물을 통해 이러한 탑이 건립된 것은 9세기로 생각되며, 조탑공양의 확산을 나타내는 사실로 평가할 수 있다.

나아가 시대가 떨어지는 듯한 석조 탑의 조립이 보다 명확해졌다. 가가와현(香川縣) 만노우마을(まんのう町)의 나카테라하이시(中寺廢寺)에서 발견된 16기의 석조유구(石組遺構)는 10세기보다 뒤에 놓이는 사례이지만 치엔지터(池辺寺跡)의 백탑과 닮은 제작방법으로서 석탑 건립의 유행을 나타내는 자료이다. 이 사례에 대해서 영관 2년(永觀 2 年, 984)에 성립된 『삼보회(三寶繪)』에 기술된 불교행사인 「(석탑石塔)」과의 관계가 시사된다. 이는 가가와 등에서 돌을 쌓아 탑을 쌓는 것에서 망자의 명복을 비는 행위로 2월에 행하였다. 이 법회에 관하여 우에하라 마히토(上原真人)는 『법화경(法華經)』의 방편품(方便品)을 나타내는 조탑에 의한 공덕을 중시하는 견해를 제시하였다.(上原 2007) 치엔지터와 같이 정연하게 배열한 백탑과 나카테라하이시의 석탑이 같은 계기를 갖는지는 의문이지만, 같은 종류의 탑을 다수 건립하는 행위가 하나의 불교행사로서 확립되었다고 하겠다. 모양은 다르지

만 백만탑과 토제의 소탑(복발형토제품과 호리병형 토제품)도 함께 탑에 대한 신앙의 확대된 것을 알 수 있다.

맺음말

토다이지 등 기록이 남아있는 사원은 각각의 법회·불교행사가 행해졌다는 것은 알 수 있지만(吉川2014), 각지의 사원에 있어서도 활발한 법회·불교행사가 일어나 불교신앙이 확실한 광범위했다는 것을 알 수 있다. 그 내용에 불전·예당을 중심으로 법회공간을 주로 하는 곳과 조탑을 중심에 배치하는 것을 보아 다양한 방법이 발현된 특징이 있다. 이러한 현상에서 보이는 것은 8세기 중반 경이며, 그 이전의 지방사원에서는 법회·불교행사의 흔적이 희박하였다고 추측된다. 연등에 사용한 등잔에 대해서도 사용한 토기가 7세기대로 거슬러 올라가는 예는 거의 없었기에 이 추측에 지지할 수 있다. 이렇듯 8세기 중엽이 일본에 있어서 불교의 전환점이라고 할 수 있다.

산림사원(山林寺院)과 샘을 갖는 사원이 8세기 중엽을 경계로 증가하며, 이 역시 법회와 불교행사의 회장으로서 기능하는 것과 관계가 있다고 생각한다(菱田2010). 『속일본기(続日本紀)』 천평17년(天平17年, 745) 10월 19일조 예는 쇼쿠천황의 병환을 낫게 하기 위하여 액사회과(藥師悔過)이 명해졌고, 「수도(京師)·키나이(畿内)의 모든 절과 여러 명산 정처(淨処)에서 약사회과의 법을 행하라」라는 명으로 회과의 법회에 있어 정처가 지시되었다. 이러한 정처에서는 법회가 의식되어 산림사원과 샘을 포함한 사원이 증가가 독촉되었다고 생각되며, 이 논문에서 택한 카미오데라, 치엔지, 나카데라하이지는 모두 8세기 중엽

부터 성립된 것은 우연이 아니라고 생각한다. 활발하게 다양한 법회의 실시와 산림사원을 시작으로 하는 정치의 가람이 급증하는 것이 궤를 같이 현상으로 파악할 수 있다.

- 伊野近富・関広尚世, 「美濃山廃寺出土土製品について」, 『京都府遺跡調査報告集』 154冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター, 2013
- 上原真人, 「中寺廃寺跡の史的意義」, 『中寺廃寺跡発掘調査報告書』 万のう町教育委員会, 2007
- 上原真人, 「神雄寺の彩釉山水陶器と灌仏会」, 京都府埋蔵文化財調査研究センター, 『天平びとの華と祈り—謎の神雄寺—』 柳原出版, 2010
- 後藤建一, 「大知波峠廃寺跡の構造と変質」, 『大知波峠廃寺跡 確認調査報告書』 静岡県湖西市教育委員会, 1997
- 佐竹昭, 「安芸国分寺跡451号土坑出土の木簡について」, 『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書 IV』 東広島市教育文化振興事業団, 2002
- 須田勉, 「古代村落寺院とその信仰」, 国士舘大学考古学会 編, 『古代の信仰と社会』 六一書房, 2006
- 大洞真白編, 『美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡 範囲確認調査 (1~5次) 報告書』, 八幡市教育委員会, 2006
- 菱田哲郎, 『古代日本 国家形成の考古学』 京都大学学術出版会, 2007
- 菱田哲郎, 「奈良時代の泉と仏堂」, 京都府埋蔵文化財調査研究センター, 『天平びとの華と祈り—謎の神雄寺—』 柳原出版, 2010
- 藤岡孝司・妹尾周三, 「安芸国分寺」, 『国分寺の創建 思想・制度編』 吉川弘文館, 2011
- 山岸常人, 「悔過会と仏堂 (東大寺二月堂)」, 『中世寺院社会と仏堂』 塙書房, 1990
- 山岸常人, 「発掘寺院の建築」, 『季刊考古学』 34号, 1991
- 吉川真司, 「国分寺と東大寺」, 須田勉・佐藤信 編, 『国分寺の創建 思想・制度編』 吉川弘文館, 2011

吉川真司, 「天平文化論」, 『岩波講座 日本歴史』 第3巻 岩波書店, 2014